

合評会（『近代ヨーロッパ大学史—啓蒙期から1914年まで—』に参加して

杉原 薫（鹿児島大学）

比較教育社会史研究会2013年春季大会においてR.D.アンダーソン著、安原義仁・橋本伸也監訳『近代ヨーロッパ大学史—啓蒙期から1914年まで—』（昭和堂、2012年）の合評会が行われた。三時眞貴子氏（広島大学）の司会のもとで進められた合評会では、まず監訳者の一人である橋本伸也氏（関西学院大学）から刊行動機や本書の特徴、本書に残された課題等についての説明がなされた。続いて、イギリス大学史を専門とする中村勝美氏（広島女学院大学）と近代フランスにおける教育を専門とし、近年の大学を取り巻く改革に強い関心をいただいております上垣豊氏（龍谷大学）による報告がなされた。以下、合評会における各氏の報告及びフロアから出された論点を整理し、私の感想のようなものを記したい。

橋本氏の趣旨説明では、2004年に出版された本書の原著（R.D.Anderson, *European Universities from the Enlightenment to 1914*, Oxford University Press, 2004）の意義がコンラート・ヤーラオシュ著、望田幸男・安原義仁・橋本伸也監訳『高等教育の変貌1860—1930 拡張・多様化・機会開放・専門職化』（昭和堂、2000年）（Konrad H. Jarausch, *The Transformation of Higher Learning 1860-1930: Expansion, Diversification, Social Opening, and Professionalization in England, Germany, Russia an the United State*, University of Chicago Press, 1983.）や近年の大学史をめぐる動向と研究成果（Walter Rüegg(ed.), *A History of the University in Europe*, 1-4 vol., Cambridge University Press, 1992-2011.）とのつながりの中で示された。さらに、橋本氏は、フランス、スコットランド、イギリスを中心とした近代ヨーロッパの教育史を専門としているアンダーソン氏がその専門分野を超え出て、ただひとりの力でドイツやイタリア、スペイン、ロシアなどを含めた近代ヨーロッパの大学をナショナル・アイデンティティや文化、ジェンダー、政治といった多様な視点から描いていることに多大なる敬意を払いながら、大学史および高等教育史の更なる発展のための下記のような三つの視点を提示した。①ヨーロッパ大学の非ヨーロッパ世界への伝播、②個別学問分野の発展過程、②現代大学史を視野に入れた国家的プロジェクトとしての巨大科学と「産・官・軍・学」複合体構造。

中村氏は、本書の特徴を七つの視点に分けて報告された。①18世紀の大学がこれまでしばしば指摘されたような知的停滞に陥っていなかったのだということを示すことでアンシャン・レジーム期の大学を再評価している、②啓蒙期の大学改革が19世紀の大学にとっての基盤となっていることを

示している、③近代大学モデルとして「フランスの高等教育モデル」を描いている、④フランス・モデルとの比較を通じて「フンボルト（ドイツ）・モデル」を相対化している、⑤総体としてのヨーロッパ大学史を描くとともにその多様性も十分に盛り込まれている、⑥ハプスブルクの大学を舞台に言語と民族アイデンティティとナショナリズムの関係性を描いている、⑦啓蒙期から1870年代までの大学の連続性に留意したうえで、1870年から20世紀初頭のヨーロッパ大学を女性、学生文化、民衆といったさまざまな視点を盛り込みながら論述している。

上垣氏は、本書を読んだ疑問を大きく分けて五つの点から示された。①ナポレオンに対する評価や教育行政といった視点から国民国家論を乗り越えるためには近代国家をどのようにとらえるべきなのか、②歴史的議論としても現代的議論としてもテーマとなりうる「研究と教育の関係性」をどう考えるべきなのか、③教養教育がもつ専門職教育の予備的要件としての性格や専門性を兼ね備えた教養教育という視点から専門職教育と教養教育の関係性をどのように理解するべきなのか、④大学は時代の変化にどう対応するべきなのか、⑤ヨーロッパ全体の中でスコットランドやオランダなどの中小規模の国家にある大学が果たした役割をどう評価するか。

フロアを交えたディスカッションでは、中村氏、上垣氏による両報告で示された論点を中心に国民国家を教育システムとのかかわりの中でどのように捉えるか、専門職教育と教養教育の関係性について考える際に中等教育・大学教育・大学院教育のそれぞれの使命を問うことが重要なのではないといった議論がなされ、さらに高等教育の大衆化を論点とした議論が繰り広げられた。本書をきっかけとして浮上してきたさまざまな論点は、基本的には歴史的議論の中で展開されるものであるが、大学に身を置く私たちにとってはごく身近に存在する現代的議論でもあると痛感した。

私は、本書に訳者の一人として参加させていただいた。大学史の専門家でもなく、翻訳も経験したことのない私は、初めての翻訳作業に戸惑い、アンダーソン氏の文章の難解さに苦しみ一何度も繰り返し原著を読んだが、そこに含まれている意味を完全に理解することはあまりにも困難であった一、自分の能力の低さに悲しくなった。翻訳作業がここまで手間と時間と労力を要するものであるとは正直想像していなかった。本書で論じられている内容から多くのことを学んだことは言うまでもないが、翻訳作業を通して学んだこともそれに劣らず多いように思う。